

民間分譲住宅地造成事業に係る  
埋蔵文化財発掘調査概要

# 木舟北遺跡

1997年3月

富山県福岡町教育委員会

## 序

本書は分譲住宅建設に伴い平成7年度に行われた発掘調査の結果をまとめたものです。

今回の調査により、中世の木舟城の城下町に相当すると思われる溝区画が2箇所みつかりました。また、極めて保存状態のよい書がみつかり、富山県の中世の馬具を考えるうえで貴重な資料になるものであります。

調査の実施にあたり、多大な協力を賜りました富山県埋蔵文化財センター・小矢部建設株式会社及び地元住民の方々に深く感謝申しあげます。

平成9年3月

福岡町教育委員会  
教育長 谷崎嘉悦

## 目 次

序	
例 言	
I はじめに.....	1
1 発掘調査にいたるまで.....	1
2 発掘調査の組織と構成.....	1
第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	2
3 遺跡の立地と歴史的環境.....	3
第2図 地形と区割図.....	4
II 調査の概要.....	5
1 調査の経過.....	5
2 調査地の基本層序.....	5
3 遺構.....	6
第3図 遺構全体図.....	7
第4図 井戸実測図.....	9
4 遺物.....	10
第5図 土器類実測・拓影図.....	12
第6図 土器類・石製品実測図.....	13
第7図 石製品実測図.....	14
第8図 金属製品実測・拓影図.....	15
第9図 木製品実測図.....	16
第10図 木製品実測図.....	17
III おわりに.....	18
引用・参考文献	
写真図版	
報告書抄録	

## 例 言

1. 本書は、富山県西砺波郡福岡町木舟地内において、民間分譲住宅地造成事業に先立ち実施した発掘調査の概要報告である。  
発掘面積 2,250m<sup>2</sup>  
調査期間 平成7年6月19日から同年9月25日  
整理期間 平成8年1月16日から同年3月29日
2. 本書に用いた方位は、実測図・本文ともに真北である。
3. 本書に使用した遺構名称（呼称を記号化）・番号は、調査時のものを踏襲している。遺構名は、溝をSD、井戸をSE、穴（土坑・柱穴等）をSKとし、番号については、通し番号としたが、重複する可能性が生じたため、313以降の№を400から付している。
4. 本書に掲載した遺構の実測は、橋本正春・神保孝造・鈴木文夫・林慶子・廣岡恵美子・三浦真一・竹本和弘・老田英樹があたり、遺構全図については、アジア航測株式会社に委託した。また、遺物の実測は、神保が行なった。
5. 本書に掲載した遺構・遺物のトレースは、神保と堀口明美が分担してあたった。
6. 本書に掲載した写真は、遺構を橋本・神保が、遺物を神保が撮影した。
7. 本書の編集は、富山県埋蔵文化財センターの協力を得、神保があたり、執筆はI-1・2を藤田辰昭が、その他を神保が担当した。
8. 本報告に関する記録類・出土遺物は、一括して富山県埋蔵文化財センターに保管されている。
9. 本書の作成にあたり調査時から整理の間、次の方々から様々な援助をいただいた。記して深甚なる謝意を表したい。木舟自治会・酒井金次・西井龍儀・狩野睦・酒井重洋・久々忠義（敬称略）

## I はじめに

### 1 発掘調査にいたるまで

平成6年7月に、民間の建設業者より建売分譲住宅建設を目的とした、福岡町木舟地内の農振農用地からの除外申請が提出された。

当該申請地は、木舟北遺跡として周囲に埋蔵文化財包蔵地の一角を占めるものであった。このため、福岡町教育委員会では、早々、富山県埋蔵文化財センターから専門職員の派遣を受けて現地確認を行い、遺跡の範囲及び遺存状況等の確認を目的とした試掘調査を実施することとした。

試掘調査は、町教委が主体となり県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を得て、平成6月12日に実施した。その結果、申請地のほぼ全域約2,250m<sup>2</sup>で、中世段階のものとみられる遺構・遺物が確認されたため、試掘結果を事業者に説明するとともに、遺跡の保護措置について関係機関との協議を重ねた。しかし、開発面積の約9割を遺跡が占めることや事業の性格上でも現状の保持は困難とみられ、記録保存を前提とした調査を実施する方向で協議が進んだ。これをうけた町教委では、発掘調査の計画を策定するとともに、その後の工程や開発事業との対応策等について事業者との協議を進めた。

平成7年度に入り、事業者との協議が合意に達し、調査事務所の仮設や発掘器材の準備を行なうとともに、県埋蔵文化財センターに調査員の派遣を依頼して、6月7日より発掘調査に着手することになった。

### 2 発掘調査の組織と構成

平成7年度、福岡町木舟北遺跡発掘調査事業の組織及び構成は、次のとおりである。

**調査主体者** 福岡町教育委員会

**調査担当者** 富山県埋蔵文化財センター調査課 主任 神保孝造・橋本正春

**調査補助員** 鈴木文夫・老田英樹・竹木和弘・三浦真一・広岡恵美子・林慶子

**整理作業員** 荒山奈美恵・杉本英子・堀口明美

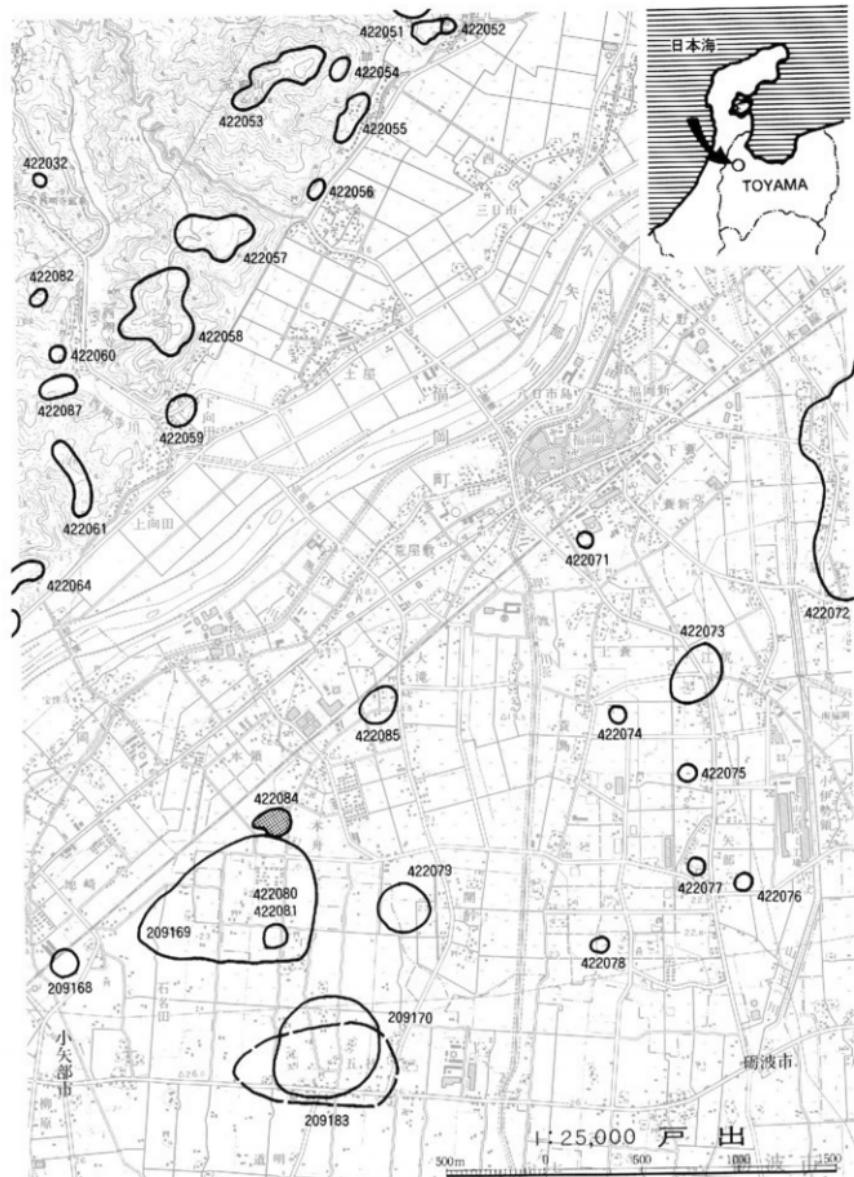
**発掘作業員** 福岡町シルバー人材センター・仙巣波市シルバー人材センター・飯小矢部市シルバー人材センター・仙高岡市シルバー人材センター（以上より派遣）

**調査事務担当者**

福岡町教育委員会 教育長 古国修一・社会教育課長 藤森 寿（以上総括）

社会教育課 社会教育主事 藤田辰昭（事務担当）

（藤田）



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

### 3 遺跡の立地と歴史的環境

富山県西砺波郡福岡町は、県の北西部に位置し、北西から南東に長く北東から南西に短い町域をもつ。その約四分の一が平地、残りが元取山を中心とする丘陵地である。丘陵裾沿いの平地よりには、蛇行しながら北流する小矢部川が見られ、右岸部に沿って町の中心街が広がっている。木舟北遺跡は、その中心街から南西へ約2kmの木舟地内に在する遺跡である（第1図）。

遺跡を含む平地は、富山県西部の広大な面積を占める砺波平野の一角をなし、その北端地域に位置している。砺波平野は、庄川と小矢部川及びその支流によってつくられた複合扇状地として知られ、扇端部には自然の湧水地帯を見ることができる。また、その末端は、一様ではなく支流や自然湧水によって侵食谷が形成され屈曲した複雑な地形となっている。当遺跡は、そうした地域の一つ、岸渡川と唐俣川で東西に挟まれた標高約21m前後の地帯に立地している。現況は、圃場整備が進み豊かな水田地帯となっており、かつて幾度となく流れを変えた庄川・小矢部川による洪水や氾濫（小幡1969）の痕跡も、今はその面影を見ることができない。ただ、調査では氾濫原、湧水地帯に位置する故に複雑で不安定な順序や絶え間ない湧き水に苦慮する日々が続いた。

次に、周辺の遺跡に目を転ずれば、北西に位置する元取山を中心とした丘陵地裾沿いの山腹や斜面には、下向田古墳群・加茂神社古墳群・加茂横穴墓群をはじめとした古墳や横穴墓の立地が目立つ。また、裾沿いの平地には、古代の駅路とされる道筋が越中国府、今の高岡市伏木地内へ続いたとされている。さらに、平地を南に進めば、小矢部川の右岸沿いに近世の官道（北陸道）が見られ、当、木舟北遺跡となる。

木舟北遺跡の周間に、当遺跡との関連が深いと思われる木舟城跡が在するほか、近年、能越自動車道及びそのアクセス道建設に伴う調査によって発見された下老子・江尻・蓑島・開ほつ大滝・石名木舟遺跡などが点在する。各遺跡の時代を見ると绳文晚期から近世に及ぶ。現在、上記の道路建設に係る遺跡は、富山県文化振興財團によって次々と発掘調査され、しだいにその内容が明らかにされつつある（富文振1993～1996）。また、木舟遺跡は、寿永三年（1184年）石黒氏が築城したものといわれ、その後、上杉氏や前田氏の居城となつたが、天正十三年（1585年）大地震により崩壊したと伝えられる城跡。その周辺には、城下町が発達したとされ、今も当遺跡を含めた付近一带に広く往時を偲ばせる“鉄砲町・鐵治屋町・紺屋町・北町”などの字名を残す（木倉・橋本1969、高岡1980、石黒他1922）。

#### 福岡町

番号	遺跡名称	種別	時代
422032	西明寺跡裏遺跡	散布地	不 明
422051	加茂神社古墳群	古 墳	古 墓
422052	馬場東城跡	山 城	中 世
422053	加茂城跡	山 城	中 世
422064	加茂横穴墓群	横 穴 墓	古 墓
422065	加茂遺跡	散 布 地	不 明
422066	鳥倉遺跡	散 布 地	不 明
422057	土屋古墳群	古 墳	古 墓
422058	下向田古墳群	古 墳	古 墓
422059	下向田遺跡	散 布 地	中 世
422060	西明寺遺跡	寺 院	？ 中 世
422061	上向田古墳群	古 墳	古 墓
422064	上五位神社古墳群	古 墓	古 墓
422071	宝生寺塚	そ の 他	不 明
422072	下老子遺跡	集 落	弥生・古墳・古代～近世
422073	江尻遺跡	集 落	古墳・中世～近世
422074	蓑島遺跡	集 落	縄 文 ・ 近 世
422075	矢部北遺跡	散 布 地	不 明

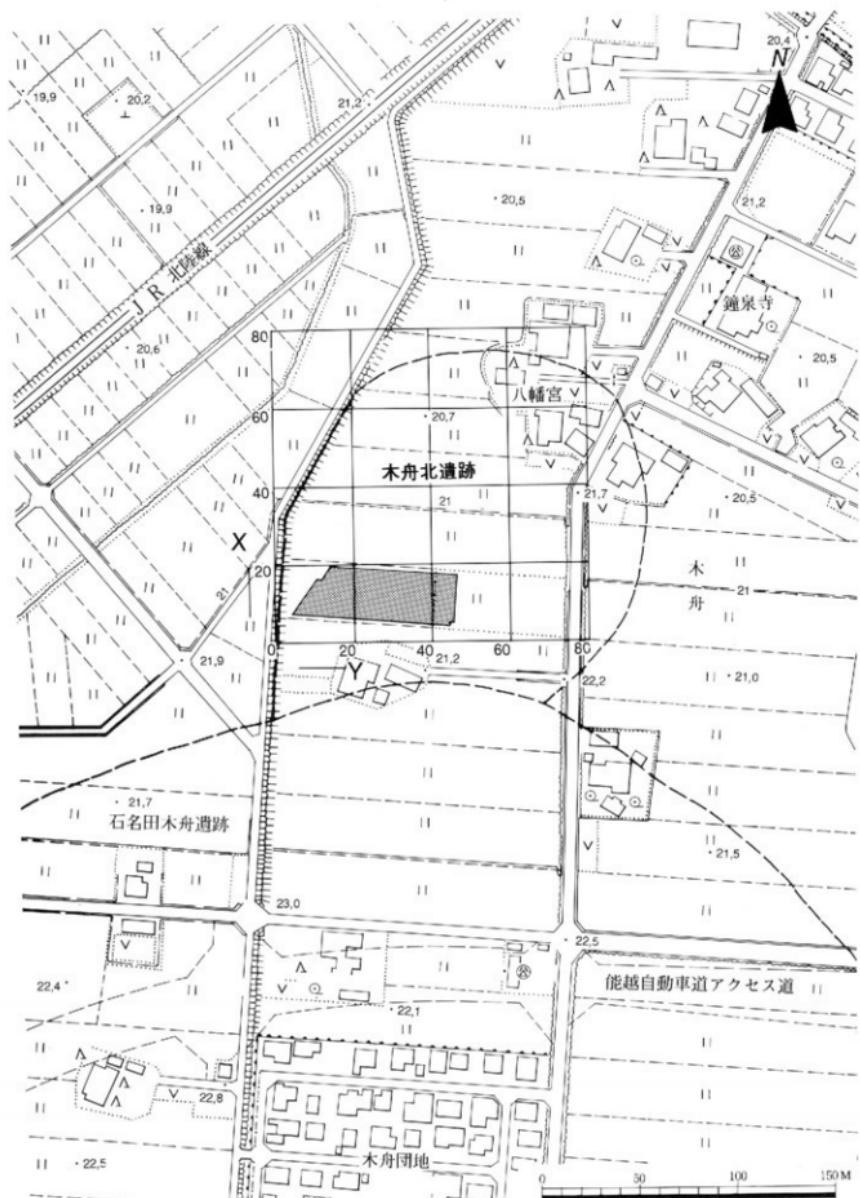
#### 周辺遺跡一覧

番号	遺跡名称	種別	時代
422076	矢部神宮寺跡	散 布 地	不 明
422077	矢部冲野A遺跡	散 布 地	不 明
422078	矢部冲野B遺跡	散 布 地	不 明
422079	開ほつ大滝遺跡	散 布 地	中 世 ～ 近 世
422080	石名木舟遺跡	散 布 地	弥生・奈良・平安・鎌倉・室町
422081	木舟城跡	城 館	中 世 ～ 近 世
422082	西明寺北古墳群	古 墓	古 墓
422084	木舟北遺跡	散 布 地	古 代
422085	大滝遺跡	散 布 地	中 世 ～ 近 世
422087	西明寺南遺跡	散 布 地	中 世

#### 小矢部市

番号	遺跡名称	種別	時代
209168	地崎遺跡	集 落	江 戸
209169	石名田遺跡	散 布 地	弥生・奈良・平安・鎌倉・室町
209170	五社遺跡	集 落・社 団	平 安 ・ 中 世
209183	五社条里遺跡	条 里	古 代 ・ 中 世

富山県埋蔵文化財センター1993刊行『富山県埋蔵文化財分布地図』より



第2図 地形と区割図 (1/2,500)

## II 調査の概要

### 1 調査の経過

調査対象地については、すでに平成6年12月に試掘調査されており、今年度の本調査はその成果を受けて実施することとなった。試掘調査の結果によれば、対象地には少なくとも中世・古代と上下2つの遺構確認面が存在する可能性がある事や、表土層から中世の遺構確認面までは、その間に良好な遺物包含層が存在しない事が判明していた。このため、今回の発掘調査は、先に中世面の調査を行い、その後、下部に移行する手順で進めることにした。

発掘調査は、事前に重機により表土から遺構確認面の近くまで一気に排土した後、国家座標軸に合わせて10m間隔に基準杭を設け（第2図）、X軸を南北にY軸を東西にとり2m×2mを一区画とし、まず人力による遺構確認作業を行った。続いて確認した一部の遺構検出作業と並行しながら、前年度に深掘された試掘トレンチの掘り起し作業を実施し、下部の層序や遺構の遺存状況を再度見なした。

その結果、当調査対象地は、大きな谷地形（侵食谷か）の縁辺部に位置し、基盤となる砂礫層が対象地の南東と北西を結んだほぼ対角線上から北に向かって落ち込む事。また、確認された全ての遺構は、その谷部が完全に埋没した後に作られており、肩部のラインから北側の地山が黄褐色シルトで、南側が赤褐色砂礫の基盤層となる事。さらに、一帯は、かつての圃場整備によってかなり深くまで一様に削平されている事が判明した。それと同時に、古代の遺構面が全く見られない事や、一帯の地下水位が高くわずかな掘削で湧水する事もわかり、その後、湧水対策を講じ本格的な遺構の検出作業に移った。

遺構の大半は、柱穴や不定形な穴で、それに井戸・溝が混ざった。これらは、大きい溝で区画された東西2つの区画内を主にまとまった。特に東側の区画内のものは、密集度合いがきつくなり複雑に重複しあった状況で検出された。また、遺物は、東側の区画溝内を中心に土器類・石製品・金属製品・木製品が見られ、量としては木製品の出土が目立った。なお、調査当初、東側の地山直上において、しばしば石臼の単独出土を見たが、その後の調査で柱穴の根石として転用されたものと判明。かつての圃場整備の影響が著しいとの証拠を残す結果となった。

以上、今回の発掘調査は、平成7年6月19日から開始し、同年9月25日までの延べ54日を要した。調査期間の終盤各遺構の写真撮影・図化作業が完了し、井戸の断割り調査に移り豊富な湧水と土砂の崩壊に苛まれながら、無事それを終了させ、最後に重機・人力による下層確認作業を終えた時は、すでに周囲の稲刈も終わりをむかえていた。

### 2 調査地の基本層序

調査対象地の層序は、前述したとおり調査地が旧氾濫原の大きな自然の谷に面している事や、かつての圃場整備による影響が著しい事などがあって、不安定で変化に富む。

およそその基本層序としては、1層（表土）：暗褐色シルト（15~20cm）、2層（旧遺物包含層か）：褐色礫混じり砂質シルト（10~25cm）が、圃場整備によって移動された擾乱層。その下層は、対象地の谷確認肩部ラインから南側では同層直下が、ただちに垣山（基盤層）の赤褐色砂礫に変化する。一方、同ラインから北側は、3層（地山）：黄褐色礫混じり砂質シルト（20~40cm）、4層：黄褐色シルト（15~20cm）、5層：黒褐色シルト（1~8cm）、6層：暗黃褐色シルト・砂質シルト（5~15cm）、7層：青灰色・暗青灰砂質シルト（8~30cm）と続き、基盤となる8層の黄褐色砂礫層に移る。3~7層が、同谷部を埋めた堆積層で、各層がまったく遺物を含まないことから、かなり早い段階に谷が埋まつたものと見られる。

遺構確認面は、北・南側ともに2層直下である。このため南側では、基盤の砂礫層中の遺構検出となり、検出した遺構を見ると北側のものに比べ残りが浅いものが目立った。また、一帯は地下水位が高く、遺構を20~30cm程度掘り下げるとき湧水する状況で、北側の3層上面にはしばしば地震による噴砂の跡が認められた。

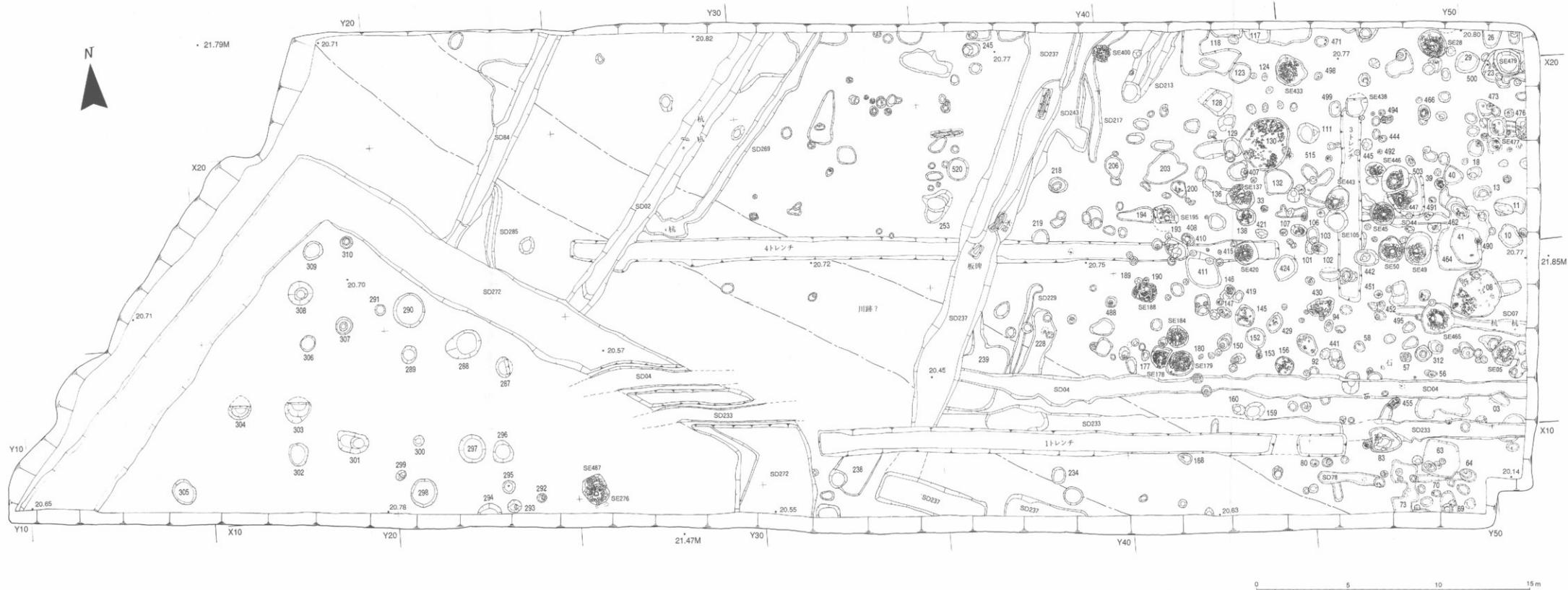
### 3 遺構

検出した主な遺構には、溝・井戸・土坑がある（第3・4図、図版第1・2）。伴出遺物からみて、大半が15世紀後半から17世紀前半代のものである。全体にかけての開場整備事業の影響が大きく、遺構掘込み面を確認したものは皆無。本来の掘込み深さを著しく失ったものが多々見られる。

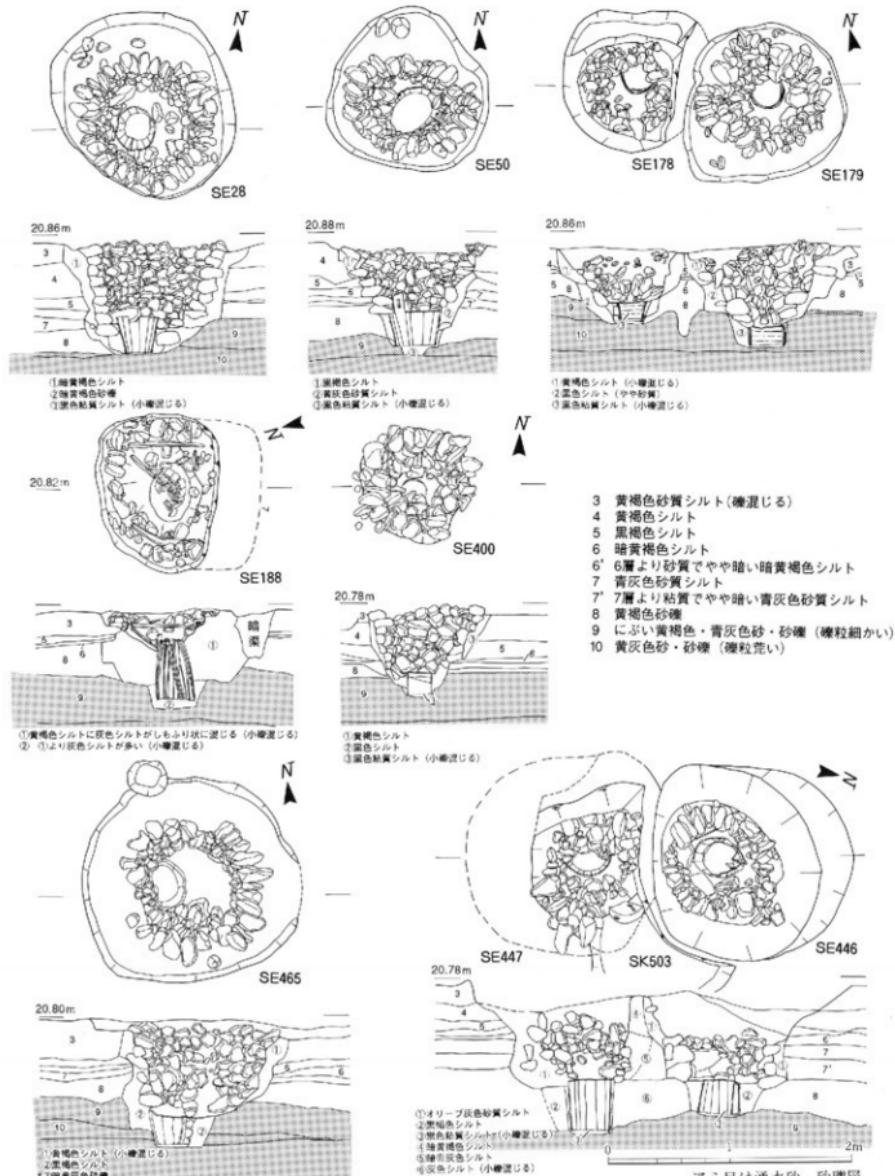
**溝（SD）** 溝は、幅深さ共に10～20cmの小規模なものから、幅が3mを越す大規模なものまでがある。いずれも素掘りと見られる。機能的にみれば、屋敷の周囲を囲んだ掘割り状の形態（区画溝）のものと、雨落ち溝や敷地内を小区画するためのもの、灌漑用として掘られたとみれるものなどがある。272・237は、掘割り状の形態をもつ溝で調査範囲の関係上その全周に渡る調査が行えなかったものの、前者が…辺約32m、後者がそれをさらに上回る規模の方方に巡る区画溝と考えられる。溝の幅は2～3mで前者が広く、深さは10～50cmを残し後者がやや深い。237の北側は217・243やSE400が切り込み幅・深さ共に不安定。溝の覆土としては、局部的な違いがあるものの上から黄褐色シルト、暗・黒褐色シルト、灰・灰黄褐色シルトが堆積する。暗・黒褐色シルト層には、植物遺体や木質片が多量にみられ、同層を主に遺物が出土。272では、東側コーナー付近に遺物がまとまる他は散漫で、237では、ほぼ全体に渡って濃密な分布を示した。特に、その西側溝の中央部付近では鉄製の鎌・轡や石製の板碑が近接して出土した他、北側にかけて多量の木製品が含まれた。272・237による両区画の方位は、ほぼ同一で真北より東にふれ、重複もなく互いに意識した配置とみてとれる。区画内には、井戸・土坑・小溝などが分布し、量・密度いずれも後者が圧倒した。02・84は、先の区画溝に比べ幅狭で掘込みがV字状に近い。溝内の一部に木杭を残し水路と見られるが、272の区画に直行することや同方位ではほ一定の間隔をもって掘込まれることから、その間は区画（屋敷）に至る道。02・84はその側溝との考え方かぶ。その他、04・07・44・78・213・233などは、水路・雨落ち溝や小区画に伴う溝の一部04・233の覆土には近世陶磁器片が含まれた。

**土坑（SK）** 土坑は、いわゆる土坑と建物の柱穴・柵跡の小穴など穴として掘込まれたものを一括した。土坑は、平面形に円形や方形のものもあるが概して不定形で、大きさが様々である。いずれも素掘り。20cm前後を残すものが主で黄褐色や暗・黒褐色の覆土となる。302では骨・炭化物片が混じり、08・130では上層を拳大の円礫が埋めた。また、柱穴は、平面形が円形のものといわゆる梢円形のものがある。規模は、後者に大きなものが日立つが掘込みの深さ20～30cmと大差がない。柱穴の底には、しばしば根石が見られた。中には石臼を転用したもの（102・456）・拳大の円礫を敷き並べたもの（146・430）があり、まれに珠洲や越前の糠・臺片を敷くもの（312）・木製の板を敷くもの（94）もみられた。また、柱根を残すもの（69・295・473・488）も多々存在し、最大の柱根は太さが30cmを越す。これら柱穴の形態や時代性を考慮すれば、時期を異にした複数の掘立柱建物（縦柱）の存在が推測される。しかし、遺構相互の重複が激しく（特にSD237区画内）時期の特定が進まず、現時点では図示を避けた。

**井戸（SE）** 井戸は、S D272区画内で2基が重複した他は全てSD237区画内の検出である。総数は24基で、重複するものが最高で1箇所3基である。いずれも石組井戸とみられるが、確認面まで石組を残すもの（28）と底から3～4段を残すもの（49）、全く残さないもの（438）がある。また、石積みにあたって石の保持をはかるため、木や竹製の楔を残すものも見られた。掘り方の平面形は、188を除く井戸全てが円形で、水溜の底が湧水層と見られる黄褐・青灰色砂礫層中に達しており、浅い276で50cm、深い447で150cmを残す程度である。水溜の施設は、大半が残り曲物が178を含め10基、桶が50を含め9基、丸太の刎り貫きが465を含め2基を数える。188は、平面が方形の掘り方をもつ。方形の石積みの内側に沿って角材を配し、四隅に杭留めを施すなど丁寧で古い様相を残す井戸である。中央に井筒状に大型の桶が据えた。各井戸に伴う遺物はわずかな量で、50から一石五輪塔の部位片が出土した他、28・184・400・465などで中世土師皿・陶磁器・硯・木製品が見られた。現段階での各井戸及び予想される建物との関係・時期など詳細は、はっ



第3図 遺構全体図 (1/150) 遺構略称名は、SD・SEのみ明記。SK略称。



第4図 井戸実測図 (1/40)

きりしない。ただ、井戸そのものは、重複状況からみて最低でも2時期に別れそう。

#### 4 遺物

出土した遺物には、土器類・石製品・金属製品・木製品と種子・骨片など自然遺物がある。大半が遺構内出土で、量としては、木製品が圧倒的に多い。遺物の時代は、古代から近世におよぶ。その主体となる時期は、15世紀後半から17世紀前半代にあり、16世紀代の遺物量が最も多い。以下、図示した遺物を中心にその概要をみる。

**土器類**（第5図・第6図1～32、図版第3） 上器類には、須恵器、土師器、中世土師器、珠洲、越前、瓦質土器、白磁、青磁、染付、瀬戸美濃、越中瀬戸、唐津、志野がある。

第5図1～5は、須恵器で1が杯蓋、2～4が高台付きの杯身、5が壺である。同6は、土師器の長割壺。いずれも流れ込み遺物である。時期は、9世紀以降と見られる。この他高杯の脚部片も出土している。中世土師器（同7～24）には、皿（7～23）・蓋（24）がある。皿は、法量に大・中・小型が見られ、口縁端部を揃みあげるもの目立つ。また、比較的小型のものには、油煙が付着したものが多い。時期は、16世紀代が主。珠洲（同27～31）は、VI期前後の壺（30・31）・壺（27・28）・鉢がある。27は、珠洲として図化したが須恵器壺の可能性もある。31の鉢は、当該時期よりやや古くなりそう。同32～35は、越前の壺・壺。35の壺は、丸みをおびた頸部に直立ぎみの口縁部がつく。同25の鉢・26の火鉢は、瓦質の土器である。青磁・白磁（第6図1～4）は、少ない。1が青磁碗、2～4が白磁の碗もしくは反り皿と思われる。同5～12は染付の碗・皿・蓋である。10の内面には、漆状の付着物が見られ容器としての転用器である。瀬戸美濃には、反り皿・丸皿などの皿類（同13～18）が多い。いずれ灰釉製品。13・18の底部内面に印花文が施され、18の底部外側には「弥」と墨書きされる。13は、15世紀後半代の反り皿。この他、鉄瓶の天目茶碗（同28・29）や水柱が混じる。19は、その壺もしくは茶入とみられる。同20～27の越中瀬戸は、灰釉の皿（20～24・27）と鉄瓶の碗・皿（25・26）がある。20・21・27の底部内面に菊の印花文が見られ、20の底部外側には墨書き痕跡を残す。17世紀前半代の遺物である。その他、志野の皿（同30）や唐津の碗（31・32）と思われるものなどがわずかに出土している。

**石製品**（第6図33～35・第7図、図版第4の14～17・図版第5） 石製品は觀、砥石、鍤、臼、鉢など生活や生産に関係するものと、板碑、五輪塔といった信仰に関係するものがある。

第6図33の觀は、細長い短冊形のもので凝灰岩質の石材。陸部の中央が使用により擦り凹む。同34は、金属用と考えられる仕上砥石である。直方体の形態で四面共によく使い込まれている。凝灰岩質の泥岩を石材としている。同35の石鍤は、所属時代がはっきりしない。或は、縄文時代に属する流れ込み遺物の可能性もある。平たい自然縫の側面4箇所に打ち欠きを施す。臼（第7図1～5）は石製品の中で最も出土が多く、総数が20点を数える。柱穴の根石や石組井戸の側石として転用されたものが多々見られ、2・3のように半分以上に割られたり、周囲を打ち欠かれたものが人半を占める。臼の種類には茶臼と挽臼があり、5の茶臼の他は全て挽臼となる。その内訳は、上臼（1・2）が14点で、下臼（3・4）が5点の割合である。石材としては、目の細かいもの（2・5）や荒いもの（1）など様々あるが、いずれも凝灰岩質。目の荒い、いわゆる富山県福光町桑山産のものが圧倒的に多い。鉢（同6～8）も同種の石材を素材に用いるものが多く、片口を付けるもの（6）や把手を施すもの（7）などがある。6は、内面に加工時の擦跡を残す。8は、五輪塔の火輪部分を鉢として転用したものと考えられる。板碑（同9）は、花崗岩質の石材で作られる。転用品らしく、表裏・頂部が擦られている。特に、表側はそれによって凹状となり、文字の痕跡すら見られない。また、頂部の一部から表側にかけてが煤けることから、二次加熱を受けたものらしい。五輪塔（同10）は、一石五輪塔の火・水輪部分の部位片である。凝灰岩質の泥岩を用いており、目が細かく軟質で、富山県氷見市戸田産の石質に似る。

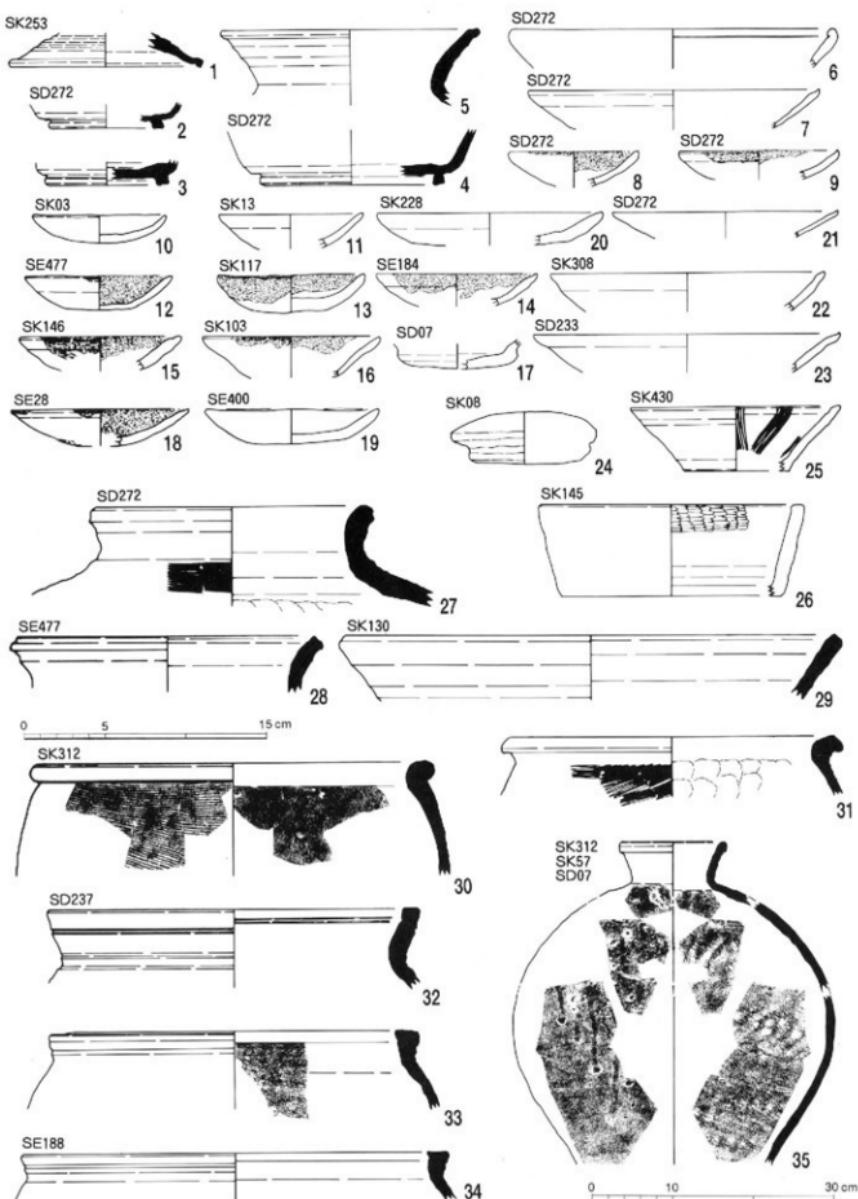
**金属製品**（第8図、図版第4の1～13） 金属製品としては、火箸（1）、鍋の脚部（11）・鉢（12）、鎌（2～5）、轡（13）、錢貨（7～10）と用途の不明なもの（6）。他にSD213の覆土から鉄滓が出土している。錢貨以外全て鉄製

品である。このうち13の轡は、立闇壺と引手の一部が欠損するもののはほぼ完形品。鏡板と立闇を立闇壺に含めて一体に作り、縦の支柱の下半部に喰先を絡め、それに遊金を介して引手をつなげるものである。16世紀の後半頃から轡の支流となる十文字轡（片山1990）に類するものであろう。また、6の不明品は、鍔や鋸状の形態を示すもので把手を見たがはっきりしない。7～10の錢貨（銅錢）は8が元祐通宝、10が明道元宝。他の2点は不明。

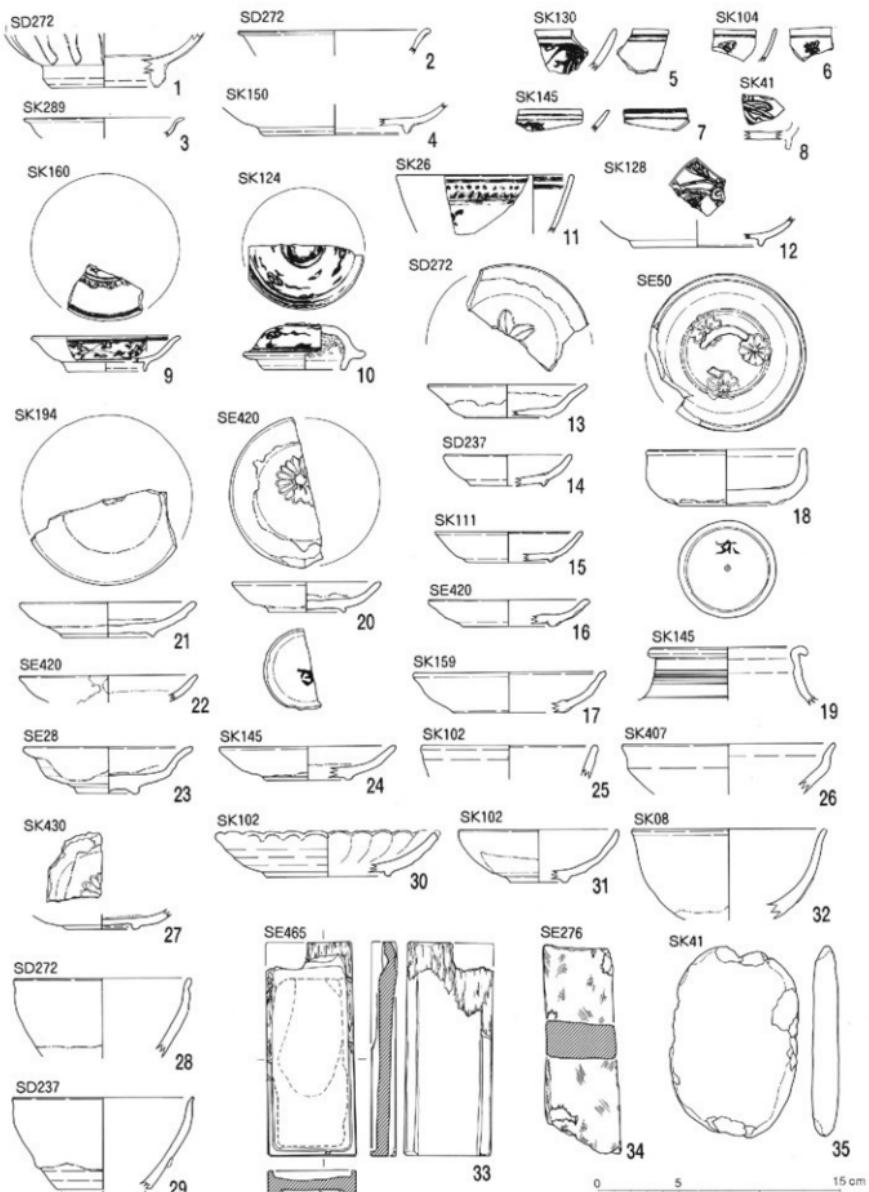
**木製品（第9・10図、図版等6～8）** 木製品は、出土遺物の中で最も量が多く、整理箱で20箱を越す。井戸の水溜に用いられた曲物や桶、建材の柱根やその他部材、さらに食事用具の箸・椀など大きさ・内容が多岐にわたる。また、遺存状況も様々で、現況の湧水内にあるものが概して残りが良く、その上に遺存したものは、原形を留めず復元困難ものが少なくない。このため、図化にあたっては、取りあえず完形に近いものや遺存状況が良く実測作業に耐えうるものに限った。図化・図示した木製品としては農具、工具、服飾具、容器、食事具などがある。一部の部材や破損したものについては、個々の特徴が把握されないと製品名・用途など判断が困難なため、不明木製品として扱った。実際の出土点数は、そのような不明品が多い。

図示した農具には、横櫛（第9図1）・木鍤（同2）がある。1は、芯持丸太材から身と柄を一本で作るもの。柄が欠損する。2は、丸太材のほぼ6分の1を割りとり、材の中央上端部に穿孔し組としとしたものである。T具は右組井戸の側石保持に用いられた模（同3・4）がある。細い丸材の先端を斜めに削りとり模としている（3）。4は竹製。他に木枝を加工したものも見られた。服飾具としては、襷（同5）・下駄（同6～9）である。5の横櫛は背・切通し線とともに丸みをおびるもので、表面が平滑に研ぎあげられている。歯數が50本と細かい。6・9は、木製の連両下駄で齒の下辺幅が台幅より広がるもの。6は、小型品。平面形が小判形を呈し、台の両端からやや内に歯が作られる。鼻緒孔は、前壺を台の中央に穿ち後壺を後歯の内側に施している。また、9は、台の前幅より後幅を狭くさせ両端を弧状にするもので、長さのわりに幅がない形である。歯は、台の中央より前側に寄せて作られ、6と違って後壺が後歯の外側に穿たれている。いずれも芯持材を素材としており、使用時にひび割れをきたしたようで9では後歯の外側に補修孔が見られる。7・8は、7が小型で雪駄状の下駄、8が大型差歎下駄の歯部と見たい。8の底面には、小砂利の食込みが著しい。

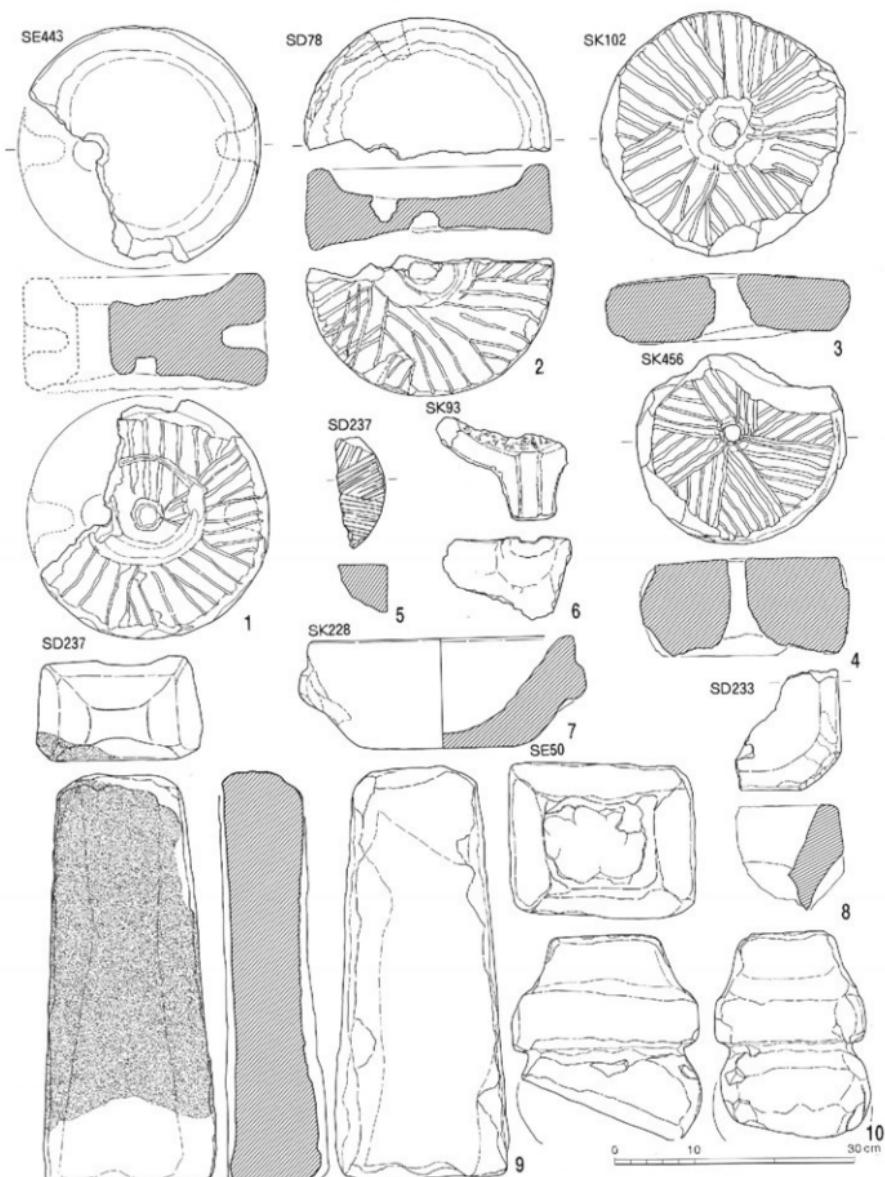
容器には、曲物・結物・挽物とその付属品としての栓（第9図18）が見られる。このうち曲物は、円形のもの（同12）と方形のもの（同17）があり、法量も様々である。前者には、井戸の水溜に転用された口径30cmを越す大型品も含まれた。結物は、井戸の水溜に転用されたものがほとんどで、大小の桶がある（第4図）。図示した第9図10・11・13～17、第10図1・2は、これら曲物や結物の底板と考えられ、第9図17・第10図1が折敷、第10図2は桶の底板であろう。また、挽物は、漆器の椀・皿がある（第10図3～11）。椀（3・8～11）は、いずれも高台が付く器形で、その高い3・10・11と低い8・9の形態に分かれそう。また、皿（4～7）は、低い高台が付く。5・10は、内外面ともに黒漆塗り。3・4・8は、内外面ともに黒漆塗りで、その上に朱漆で尾扇や木の葉・円文様を描く。6・9は、内外面ともに朱漆塗り。7・11は、内面が朱漆。外面が墨漆塗りの上に朱漆で草・木などの文様を描いている。6・7は、塗り・研ぎが良好な良品。他は、粗悪で漆膜の剥離やひび割れが目立つ。食事具としては、箸（第10図12～14）・杓子（同15）・匙（同16）が図示した。15は、曲物もしくは結物の底板を転用したものと見られる。いわゆるめし杓子の形態で、身の先端が丸く作られている。その先端から裏側にかけて二次加熱の痕跡を残す。16の匙は、剣物で柄・身の全体に渡って平滑に研ぎだされた良品である。その他、不明木製品として第10図17～22に挙げた。このうち17は、訪鑑車状の形態で、中央部に穿孔を施す。18・19は、籠状を呈する。18は、先端部に穿孔をもち二次加熱を受ける。19は、竹製品。頭部に抉り加工が見られる。21は、籠もしくは刀子形木製品と考えられるもので、柄が欠損する。22は、結物の底板を転用して両端部に再加工を施すものである。



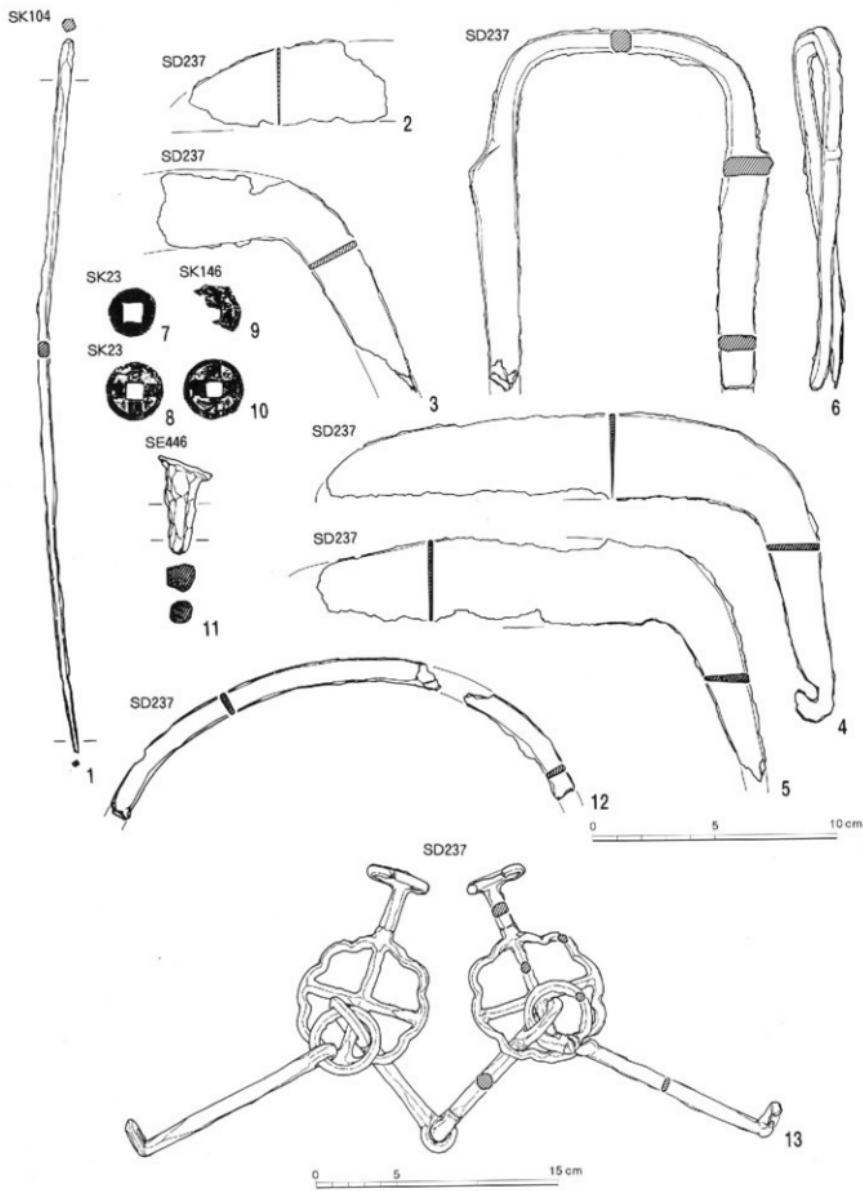
第5図 土器類実測・拓影図 (1~24・27~29: 1/3, 25・26・30~35: 1/6)  
3: No.5トレンチ 5: X19・20Y36 31: X18・19Y49・50 33: X20・21Y47



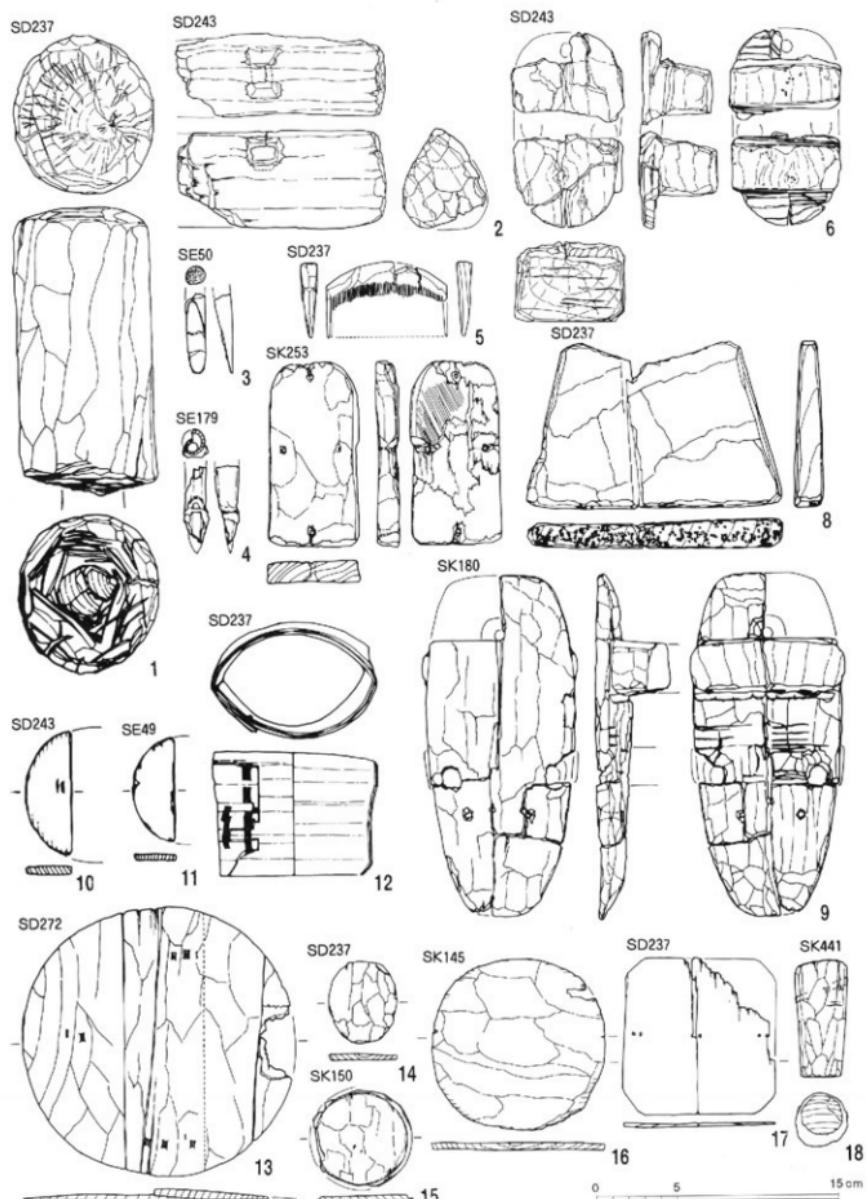
第6図 土器類・石製品実測図 (1/3)



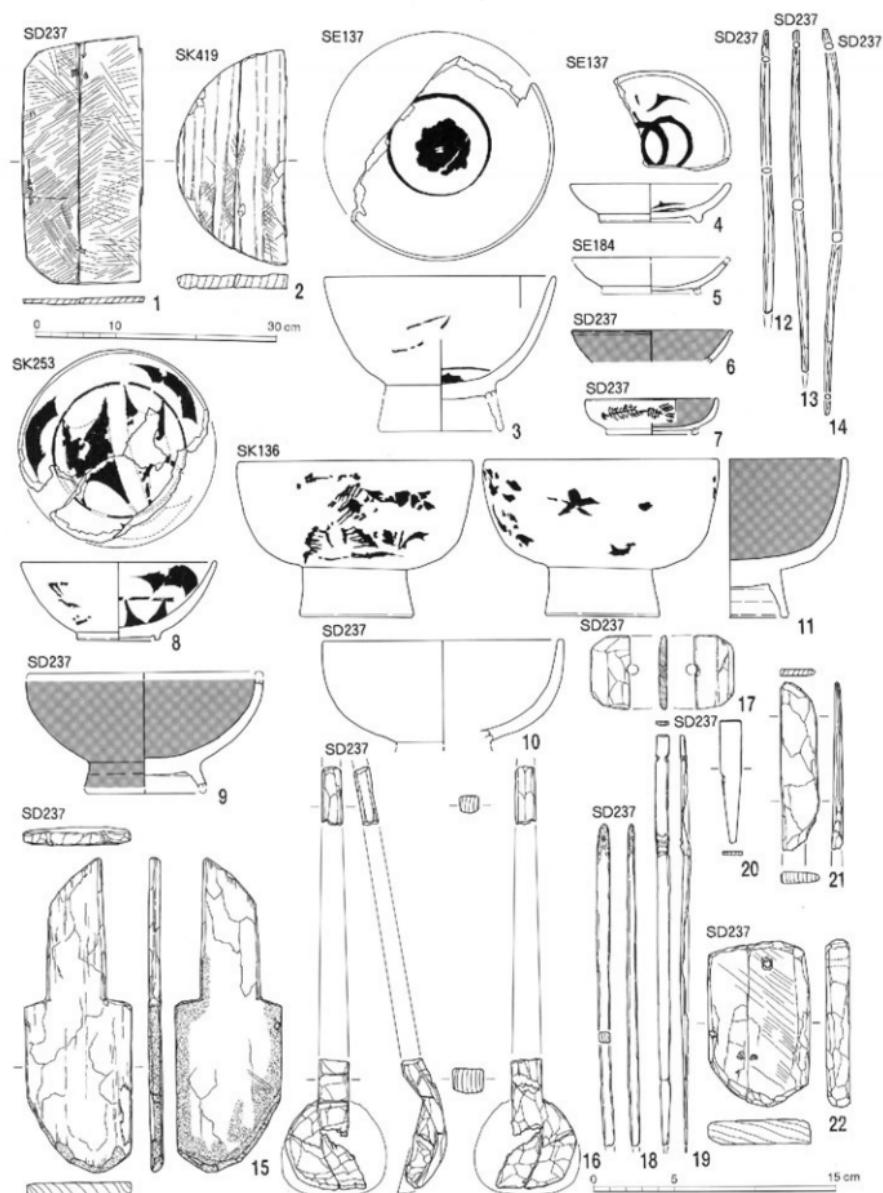
第7図 石製品実測図 (1/6)



第8図 金属製品実測・拓影図 (1~12:1/2, 13:1/3) 10:X18・19Y49



第9図 木製品実測図 (1/3)



第10図 木製品実測図 (1・12・18:1/6, 3~17・19~22:1/3) 21: №13トレンチ

### III おわりに

今回の調査では、16世紀代を主体に古代から近世までの遺物が出土し、ほぼ前者を中心とした溝区画・柱穴群・井戸などの遺構が発見された。これらの発掘資料については、現在も整理途上にあり、今後さらに検討を加える事柄が多く残されている。当概要は、こうした段階での成果を速報的にまとめたものであり、この点を踏まえここでは前章まで述べ、判明した点を要約しおわりとする。

1 木舟北遺跡は、庄川と小矢部川及びその支流によって形成された砺波平野の複合扇状地末端部に立地する。

調査対象地は、圃場整備が整い平坦な地形を示すが、調査では中央から北側にかけて大きな谷（侵食谷か）地形となることが判明し、かつての扇状地末端部地形の様相（小幡1969）の一端を窺い知る結果となった。

2 検出した遺構は、いずれも谷地形が自然に埋まった段階で作られており、遺構の広がりから見ても当遺跡の範囲がさらに北側に長く延びるものと推定される。今回の調査対象地は、遺跡のほぼ南西部にあたることになる。

3 発見された溝区画・柱穴・井戸などの遺構は、個々に検討しなければならない事柄が累積するが、相対的に見れば同一溝区画内で数時期にわたって、建て替えが繰り返された屋敷跡と考えられる。区画溝については、その周囲を巡らす堀割りもしくは敷地区画の溝と見られる。東西両区画ともほぼ同一の方位を向き、互いに重複することもなく整然と配置されており、同一時間幅の中である種の規則性に基づき作られた可能性が強い。

当該期の頃といえば、当遺跡の南には、寿永三年（1184年）石黒氏により築城され、その後、天正十三（1585年）の大戦役で埋没・崩壊し、翌年以降まもなく廃城となった木舟城跡がある。往時にはその周辺に城下町が発達したといわれ、付近一帯には今もそれを物語る様々な字名が広く各所に残っている。（木倉・橋本1969、高岡1980、石黒他1992）。実際、地元では当調査対象地一帯を「元、紺屋町。その後、宝屋敷（ブヤシキ）」と呼称すると言ふ。当出土遺物の大半もその廃城前後の年代に近く、今回発見された屋敷跡ひいては当遺跡全体が、そうした城下町の一角を構成した可能性が高そう。ただ、広範囲に残る字名の分布範囲に比べ今回の調査域があまりにも点的な事や、城下町自体の実態把握がされていない現況下での判断には無理がある。ここではそれに関連するもの、もしくはそれを母体としその延長線上で作られたものとの見通しにとどめ、この点は今後の当該遺構・遺物個々の検討と共に昨今、当遺跡に接した周辺部の遺跡群が大規模に調査（高文振1993～1996）され、整理作業が進みつつあり、その成果を含めた資料の増加をまって深めていきたい。

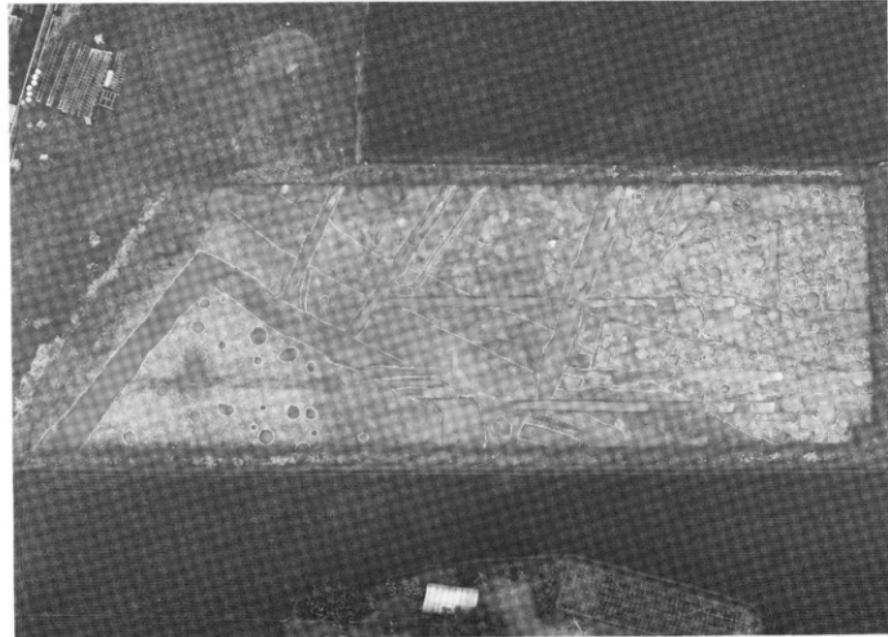
4 出土遺物としては、16世紀代を主体に土器類・金属製品・石製品・木製品が見られ、内容も多岐にわたり往時の生活を知る上でその一端となろう。特に鉄製の櫛は、その年代と共に類例が少ない実用品で極めて残りが良く資料価値の高いものである。また、石製品や木製品の中には、明らかに原材や产地を異にする製品が混在しており、今後の分析を踏まえれば、その流通過程の解明に寄与する資料となろう。

### 引 用・参考文献

- イ 石黒兵助・成田忠孝・松本正男 1992 『貴船城古今誌』木舟城跡保存会  
オ 小幡信夫 1969 「一 郷土を生み育てた自然 (I) 歴史的足場としての地形」『福岡町史』福岡町役場  
カ 片山寛明 1990 「論義 和式櫛の展開 五 室町時代の櫛」『日本馬具大鑑 二 中世』日本中央競馬会  
キ 木倉豊信・橋本芳雄 1969 「四 ゆらぐ律令制と武家の天下 8 佐々と前田の抗争」『福岡町史』福岡町役場  
タ 高岡 徹 1980 「富山県 城郭解説〔西砺波郡〕木舟城」『日本城郭大系 7 新潟・富山・石川』株式会社新人物往来社  
ト 富山県教育委員会 1980 「富山県歴史の道調査報告書 一北陸道一」所収  
富山県文化振興財団 1993 「埋蔵文化財年報(4) 平成4年度」財團法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所  
富山県文化振興財団 1994 「埋蔵文化財年報(5) 平成5年度」財團法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所  
富山県文化振興財団 1995 「埋蔵文化財年報(6) 平成6年度」財團法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所  
富山県文化振興財団 1996 「埋蔵文化財年報(7) 平成7年度」財團法人富山県文化振興財团埋蔵文化財調査事務所  
ナ 法令国立文化財研究所 1985 「第Ⅱ章 遺物解説」『奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集団題 近畿古代編』所収

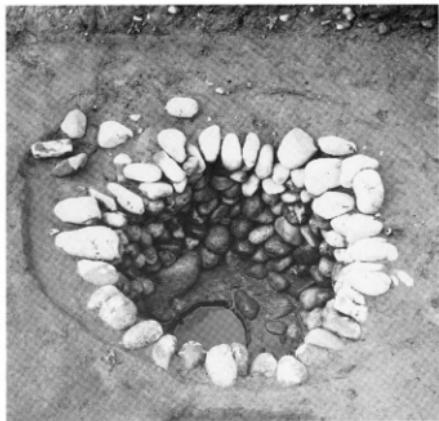


調査区近景（東より）



調査区全景

図版第2



SE28 (南より)



SE50 (南より)



SE178・179 (南より)



SE188 (西より)

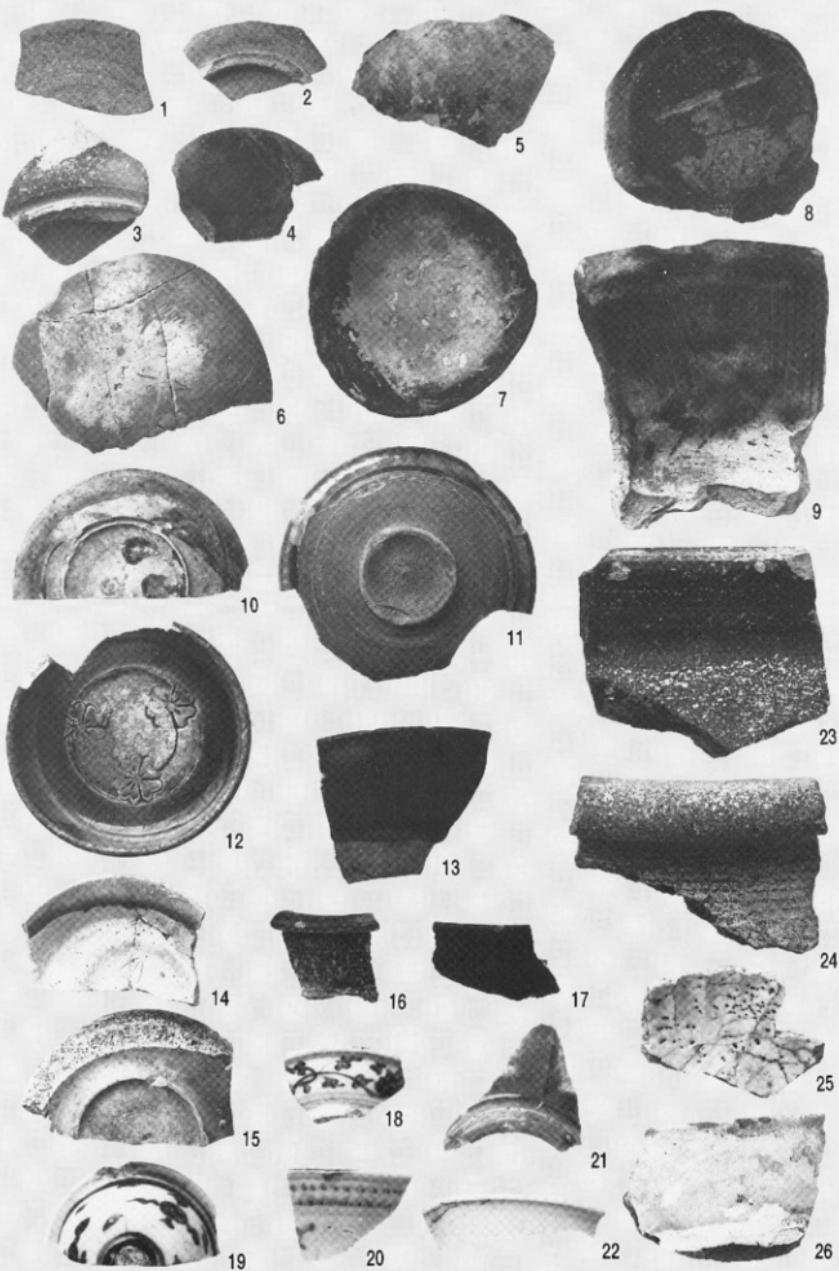


SE447・446 (東より)

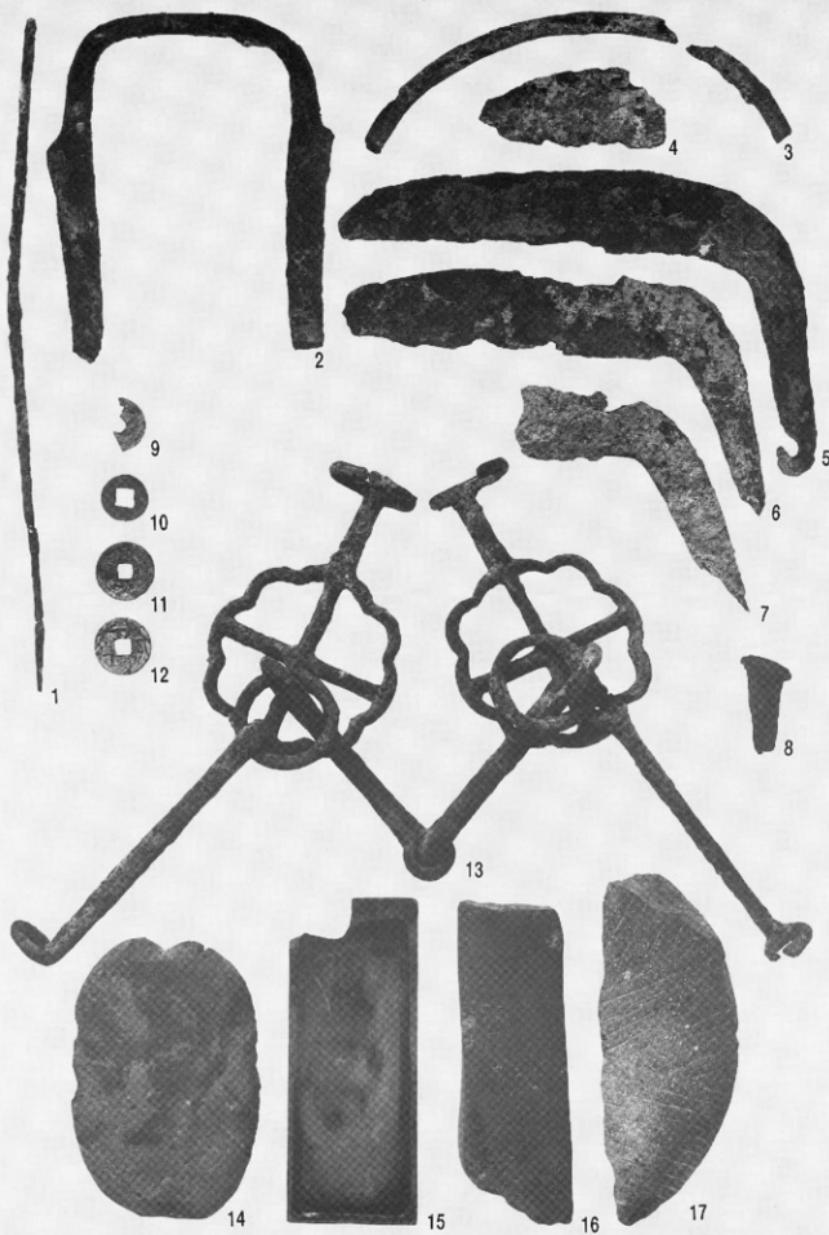


SE465 (南より)

図版第3

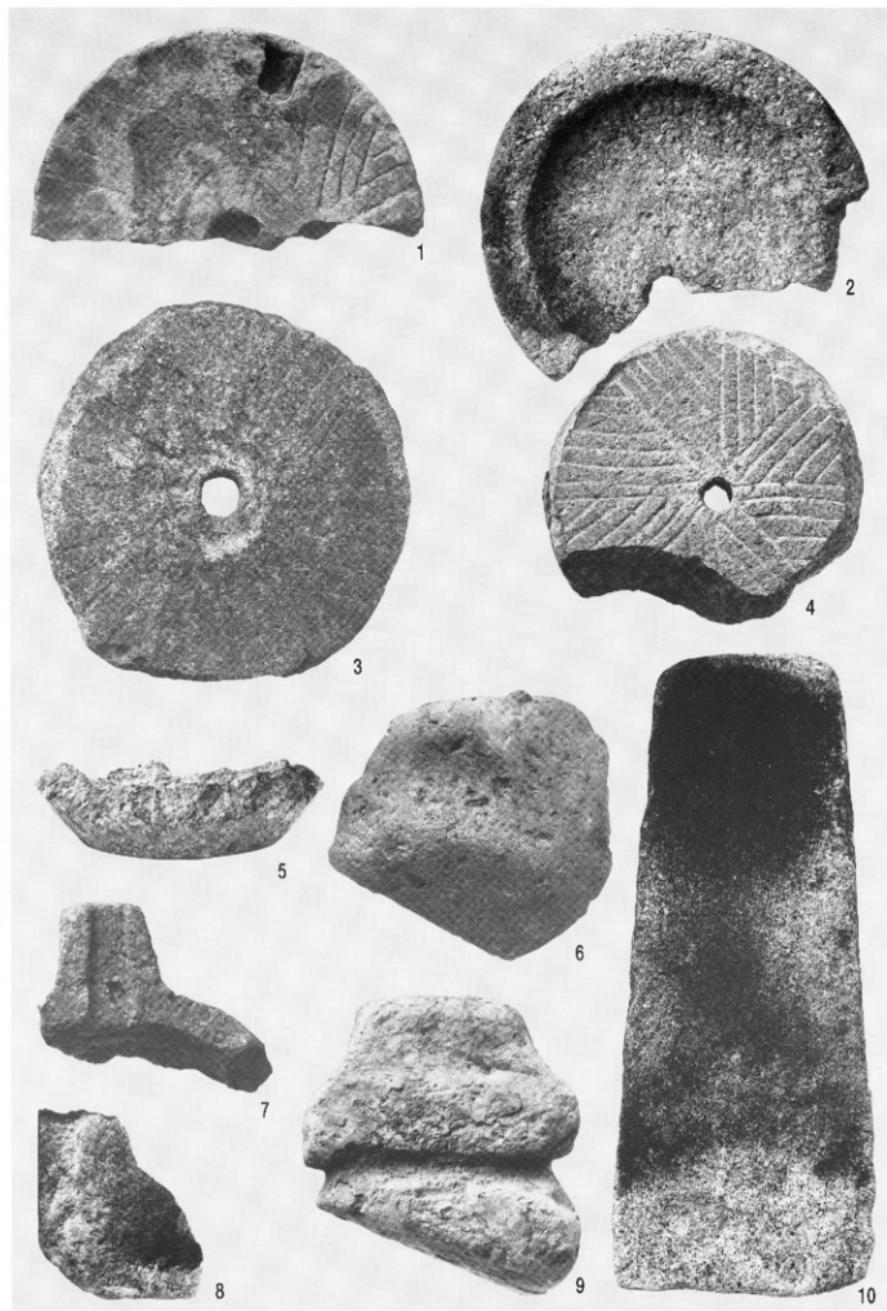


圖版第4



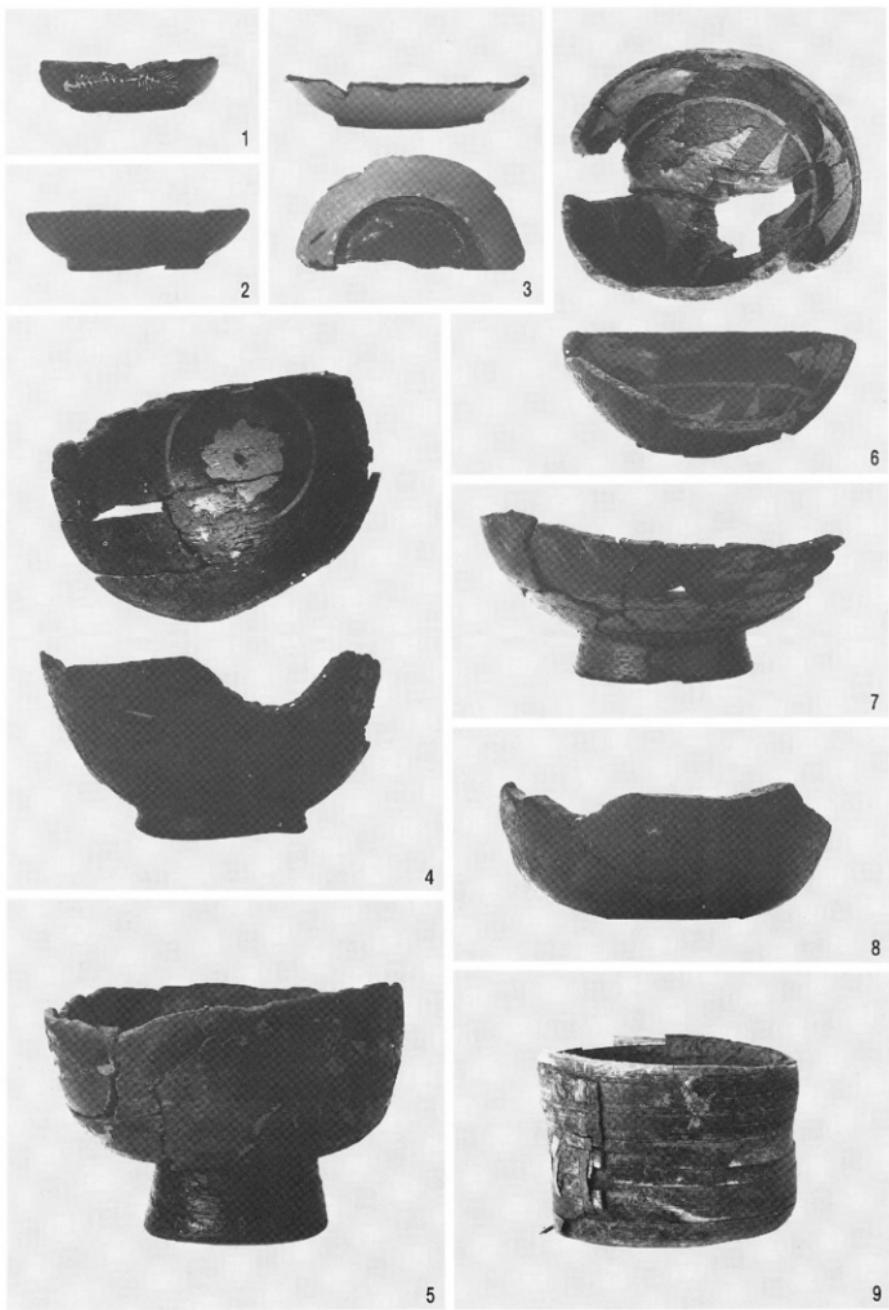
金屬・石製品 (1/2)

図版第5



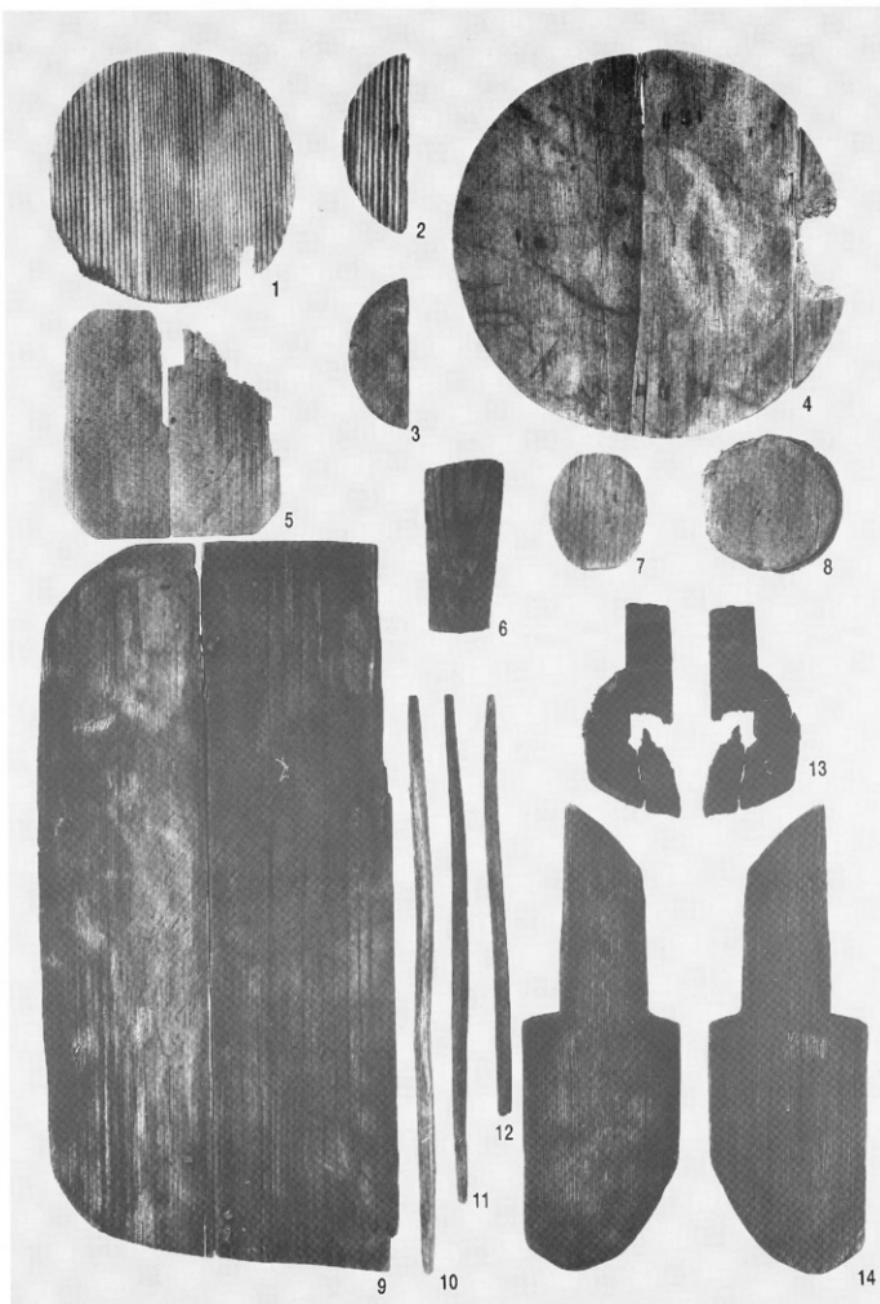
石製品 (1/4)

図版第6

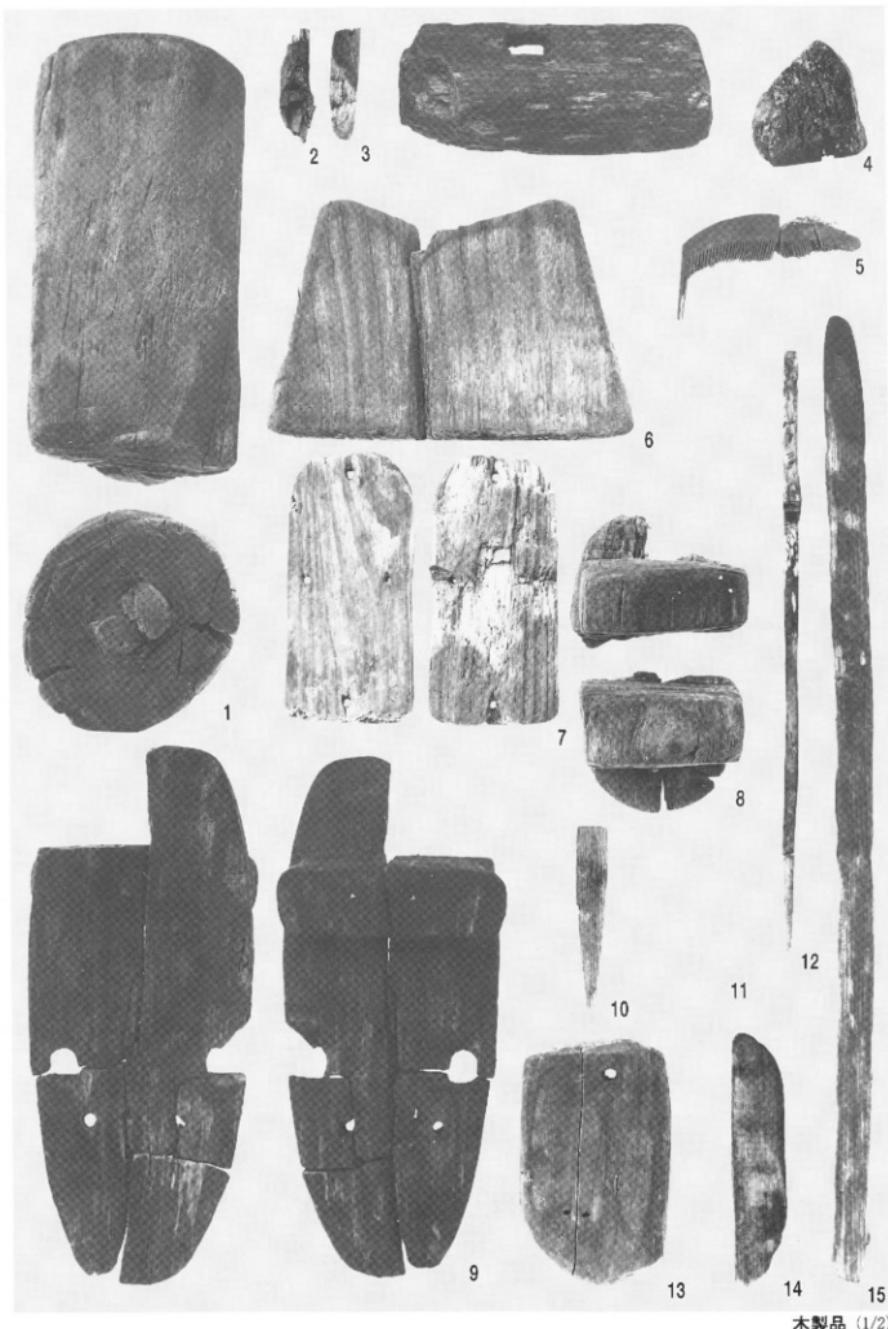


木製品 (1/2)

図版第7



圖版第8



木製品 (1/2)

## 報告書抄録

ふりがな 書名	民間分譲住宅地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査概要 木舟北遺跡							
編著者名	神保孝造							
編集機関	富山県埋蔵文化財センター							
所在地	〒930-01 富山県富山市茶屋町206-3							
発行機関	福岡町教育委員会							
所在地	〒930-01 富山県西砺波郡福岡町大滝12							
発行年月日	西暦1997年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 經	調査期間	調査面積	調査原因	
木 舟 北	富山県西砺波郡 福岡町木舟120-1	市町村 4 2 2	遺跡番号 0 8 4	36度 41分 30秒	136度 54分 53秒	19950619 ～ 19950925	2,250m <sup>2</sup>	宅地造成 に伴う 事前調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物			特 記 事 項	
木 舟 北	集落跡	古代 中・近世	溝 井戸 その他 土坑・柱穴など	16条 24基 318個	土器 石製品 金属製品 木製品	須恵器、土師器 中世土師器、珠洲、越前 瀬戸・美濃、越中瀬戸、 唐津、志野、染付、青磁 白磁 石臼、石鉢、板碑、五輪 塔、石鏡 櫛、鎌、鍋、火箸、古銭 漆器椀、箸、折敷、曲物 桶、杓子、下駄、櫛、横 櫛、楔、木鍤、杭、柱根 板材	中世城下町に関する 速深い屋敷割り を検出した。	

民間分譲住宅地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査概要

### 木舟北遺跡

発行日 平成9年3月31日

編集 富山県埋蔵文化財センター

発行 福岡町教育委員会

〒930-01 富山県西砺波郡福岡町大滝12

TEL(0766)64-5333(代)

FAX(0766)64-6064

印刷 日興印刷株式会社

